

人類学関連学会

5学会合同公開シンポジウム

- 題 目 『〇〇なヒトーヒトの呼称も人それぞれ』
- 対 象 高校生・大学生・ほか
- 日 時 2022年9月19日（月）14：00～17：00
- 会 場 京都産業会館ホール北室（A会場）・
同時オンライン配信
- 世話人 中川尚史（京都大学／日本霊長類学会会長）

背 景

これまでも多くの知識人がヒト（ホモ・サピエンス：賢いヒト）の特質に着目したヒトの呼称を提唱してきた。ホモ・ロクエンス（話すヒト）、ホモ・ファールベル（工夫するヒト）、ホモ・ルーデンス（遊ぶヒト）、ホモ・ソシアビリス（社交するヒト）、ホモ・モビリタス（移動するヒト）などなど。新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、われわれヒトの生活様式を一変させ、ヒトの根源的ともいえる特質を揺るがすにいたった。唯一言語を操り、移動能力が著しく高く、自集団以外の他個体にも寛容で、一緒に集まることができるヒトという動物種が、移動すること、集まること、対話することの制限、禁止を余儀なくされたわけだ。

新型コロナの流行以前に、世界を席卷したと言えるのがイスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリ著『サピエンス全史ー文明の構造と人類の幸福』である。本著作に象徴されるように、人類学には総合的な視点と知識が必要とされる。令和4年度日本霊長類学会と日本人類学会は、両学会共通の課題である「人類の起源とその進化」について改めて議論を深めるべく21年ぶりに連合大会を開催する。さらに、人類学および関連学問分野の発展を図ることを目的として発足した人類学関連学会協議会が毎年行っている合同シンポジウムの世話人が日本霊長類学会に当たった。

目 的

この千載一遇の機会を利用して、協議会参加団体である日本文化人類学会、日本民俗学会、日本生理人類学会にも協力を仰ぎ、コロナ禍で揺らいでいる特質を含めヒトの特質について総合的な視点から議論することを目的とした公開シンポジウムを開催することにした。各学会の演者の先生方にはそれぞれの立場でヒトの代表的特質だと思われる呼称を演題として、講演していただく。

“民俗”に生かされるヒト、 “民俗”を生かすヒト： 土着と前衛

真野 俊和
（筑波大・院歴史人類）
People live in folklore, people find folklore
Toshikazu SHINNO



皆さんは、民俗学という学問が「民間伝承」つまり世の中に伝えられてきた文化事象を研究対象にしているということについて、濃淡の違いはあれ理解していると想定してよいと思う。そこで今回、私は、直接に民俗という概念ではなく、“民俗”に向かい合うヒトの姿勢を二つの側面から捉えてみようと考えた。副題は、その二つの側面を極端に言い切ってしまうと、こんな表現もできるだろうという意味合いである。ここで二つとは、文化を伝えていく行為と作り上げる行為の両面をさしているとも言える。しかし今日は前者についての話はあまりしない。後者、つまり“前衛”について最初に取り上げる話題は、民俗の一般的なイメージから少し外れるかもしれない。誰でも知っているであろう画家パブロ・ピカソは、生涯を通して様々な作風が変化した。なかでもキュビズムという立体形をモチーフにした作風は、ピカソを前衛美術の旗手に押し上げた。彼のキュビズムはアフリカの民俗的な美術にインスパイアされたと言われており、アフリカのモチーフは後々までピカソ美術の中核になった。また別の視点から、例えば衣服のファッションに関心を向けてみると、まさにフォークロアと呼ばれる独特のデザイン分野がある。サン＝ローランとか高田賢三など先端的なデザイナーによって、フォークロアつまり民俗のモチーフは世界の前衛に躍り出て、その趣向はいまなお健在である。さて後半では両側面のもう少し穏やかな対峙に目を転じてみよう。土着的な意味での民俗をほとんど見いだせなくなった今日、それでもある特異な民俗事象が、地域を代表する文化として脚光を浴びることがある。皮肉なことにかつてその担い手だった人びと自身は、地域の真っ当な構成員として見なされていなかったりする。だがなぜか町おこしという場面になるとこのような逆転がおきる。この場合の民俗の起爆剤化は、先のような文化的前衛化とは異なるだろうが、通底する様相は確かにあるのだ。

経 歴

真野 俊和（しんのとしかず） 元筑波大学大学院歴史人類学研究科 教授／日本民俗学会

東京教育大学理学部卒業、同大学院文学研究科修士課程修了、博士（文学）。福島県教育委員会文化課学芸員、上越教育大学大学院助教授、同教授、兵庫教育大学大学院教授（兼任）、筑波大学大学院教授（2008年3月定年退任）。学部では数学を専攻したが、大学院では日本民俗学を専攻した。修士過程での研究テーマとして四国遍路を初めとする巡礼や諸参詣習俗と出会い、後に博士論文『日本民俗宗教の遊行性の研究』（筑波大学）として結実した。

2008年より新潟県上越市に居を定め、現在は地元のNPO法人「頸城野郷土資料室」を拠点に文化活動（市民講座講師など）に携わり、また同NPO学術研究部が刊行しているオンライン紀要の編集も管理している。

著 書

『日本の祭りを読み解く』（2001年、吉川弘文館）

『日本民俗学原論 人文学のためのレッスン』（2009年、吉川弘文館）

『「人文学」という思考法 〈思考〉を深く読み込むために』（2015年、社会評論社）

プ ロ グ ラ ム

- | | | |
|-------|---------------------------------------|---------------------|
| 14：00 | 世話人挨拶 | 中川 尚史 |
| 14：05 | “民俗”に生かされるヒト、
“民俗”を生かすヒト：
土着と前衛 | 真野 俊和
（日本民俗学会） |
| 14：35 | モノを作るヒト | 金子 守恵
（日本文化人類学会） |
| 15：05 | 寛容なヒト | 中川 尚史
（日本霊長類学会） |
| 15：35 | 適応するヒト | 前田 享史
（日本生理人類学会） |
| 16：05 | 移動するヒト | 海部 陽介
（日本人類学会） |
| 16：35 | 総合討論 | |

主 催

第 76 回日本人類学会大会・第 38 回日本霊長類
学会大会連合大会（ASA-PSJ2022）実行委員会

後 援

京都大学大学院理学研究科, 京都市教育委員会,
京都府教育委員会

助 成

日本学術振興会 科学研究費補助金
研究成果公開促進費（研究成果公开发表（B））

モノをつくるヒト

	
金子 守恵	
 （京大・アフリカ研）	
A person who makes daily commodities	
Morie KANEKO	

エチオピアにおいて調理具として利用されている土器の製作過程を記述分析することにより、モノをつくるヒトの特徴を関係論的に検討する。エチオピア西南部高地に暮らすアリの女性職人は、専門的に土器を製作し、定期市で販売して生計をなりたさせている。女性職人から土器を購入して利用するひとは、外来の調理具も併用して、日常的な食事の調理を行っている。土器づくりにおいては、素材を入手した職人が、成形・焼成、販売し、調理具として繰り返し利用されるようになるまで長期間にわたって土器と関わる。その一連の過程（ものつくりの過程）における、モノをつくるヒトの特徴を「手」という民俗概念を手がかりに検討した。職人は、粘土を一方向的にコントロールして土器を成形しているのではなく、素材の状態を識別し自らの「手」にあわせて壊れずに製作する方法を試行錯誤して確立していた。ここでは共通の標準化されたものつくりの過程が見出しにくいことがわかる。そのことは、個々の職人が、それぞれの「手」にあわせて壊れずに最後まで土器を製作することに留意し、独自の手順や方法を互いに尊重していたことによって実現している。モノをつくるヒトの個性が強く意識され、差異を承認しているといえる。そのような差異（土器づくりの手順や土器種の変更）が生じる契機として、結婚や出産など自らが経験するライフイベントが意識されていた。アリの女性職人が有形の土器を創りだす過程には、自らの身体を手がかりにして確立した技法と、技法的な差異を契機にして構築される社会的な関係が影響を及ぼしている。ヒトがモノをつくるということは、日常生活における必要性を満たすためだけではなく、社会の中における私という人格を認識し、他者と異なる存在として形成することとも強く結びついている。

経歴

金子 守恵（かねこ もりえ）**京都大学アフリカ地域研究資料センター／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授／日本文化人類学会**
北海道出身。京都大学人間・環境学研究科助教を経て、2016年より現職。
アフリカ、エチオピアで土器づくりの女性職人に入門し、伝統的な身体の動かし方に着目して、技法の伝承と創造性について研究してきた。在来の植物繊維をもちいた製品の製作など実践的な活動にも従事している。地域の人びととの協働作業を通じて、技術の受容や知識の共有過程に注目しグループの形成過程にかんするフィールドワークを行なっている。

著書

『アフリカン・アート&クラフト』（共著、2007年、明石書店）
『土器の民族考古学』（共著、2007年、同成社）
『土器づくりの民族誌－エチオピア女性職人の地縁技術』（2011年、昭和堂）
『ものの人類学』（共著、2011年、京都大学出版会）
『紛争をおさめる文化』（共著、2016年、京都大学出版会）

など

寛容なヒト

	
中川 尚史	
 （京大・院理）	
Tolerant humans	
Naofumi NAKAGAWA	

ヒトは多くの哺乳類の中でも、霊長類の中でも、ひときわ攻撃性が低く寛容な種であり、それらの性質が基盤となって高い社会性、協力性を示す。近年、イヌの家畜化の始まりは、人為選択によるのではなく、ヒトに対する攻撃性が低くヒトを怖れない形質を持ったオオカミが、ヒトの食物を利用することで生存率、繁殖率を上げ、自然選択されてきたとする自己家畜化という考え方が脚光を浴びている。そして、イヌの持つ高い社会的知性と相まって、ヒトとイヌ

という系統の全く異なる生物が、こうした類似の形質を進化（収斂進化と呼ぶ）させてきたと考えられている。さらには、チンパンジーの1種ボノボも、この収斂進化の土俵に挙がってきた。本発表では、まずこの自己家畜化仮説と、イヌ、ヒト、ボノボの収斂進化について概説する。その上で、寛容性の収斂進化が、霊長類の中でさらに広い範囲で起こっている可能性を示す。具体的な事例として挙げるのは、ニホンザルである。ニホンザルは厳格で、直線的な順位序列が存在するサルとして有名で、ニホンザルの属するマカカ属の中でも専制型社会を持つと言われてきた。ところが、近年、餌付け群としては淡路島個体群、純野生群としては屋久島個体群が、比較的高い寛容性を示すことが分かってきた。彼らの寛容性が、他者の心の痛みの理解と関連する慰め行動、高度な社会行動である食物分配行動、協力行動の基盤となっていること、さらにはその寛容性には遺伝的基盤が存在する可能性について紹介する。

経歴

中川 尚史（なかがわ なおふみ）**京都大学大学院理学研究科 教授／日本霊長類学会**
京都大学農学部卒業。同大学院理学研究科博士後期課程修了。博士（理学）。日本学術振興会特別研究員（PD）、シオン短期大学助教授、神戸市看護大学助教授、京都大学大学院理学研究科助教授、准教授を経て2015年8月より現職。小4よりアフリカのサバンナに住む動物の研究をすることが将来の夢となり、博士課程からカメルーンのパタスモンキーの研究を始めたことでその夢を果たす。若い人たちにサル学のフィールドワークの道に進んでもらうべく、一般向けの書籍の執筆編集、講義、講演も多数行っている。2021年コロナ禍の中、老体に鞭打ってガーナでパタスモンキーの調査を開始。

著書

『サルの食卓－採食生態学入門』（1994年、平凡社）
『食べる速さの生態学－サルたちの採食戦略』（1999年、京都大学学術出版会）
『カメルーン・トラブル紀行』（2003年、新風舎）
『サバンナを駆けるサルーパタスモンキーの生態と社会』（2007年、京都大学学術出版会）
『日本のサル学のあした－霊長類研究という『人間学』の可能性』（編著、2012年、京都通信社）
『野生動物の行動観察法－実践　日本の哺乳類学』（共著、2013年、東京大学出版会）
『“ふつう”のサルが語るヒトの起源と進化』（2015年、ぶねうま舎）
『日本のサルー哺乳類学としてのニホンザル研究』（共編著、2017年、東京大学出版会）、他多数。

適応するヒト

	
前田 享史	
 （九州大・院芸工）	
Adapting humans	
Takafumi MAEDA	

人類は不快（危険・罰）を避け、快（安全・報酬）を強く求める性質をもっている。現代の生活環境は科学技術の発達によって温和で快適な人工環境に制御されているが、このような人工環境は我々が安全さや便利さといった「快」をもとめた結果であろう。また、人類は熱帯雨林からサバンナに生息地域を広げ、そして砂漠を渡り、山脈を越え、北極圏すらも通り越えて、地球上のあらゆる地上に生息地を広げてきた。つまり人類は厳しい自然環境に対して適応しうる能力を持っていたと言える。当然、現代の温和な人工環境に対しても生理的に容易に適応することができる。一方で、この適応性の高さ故に様々な生理機能を発揮する機会の少ない状況にも適応してしまい、その結果、様々な健康障害、例えば熱中症などが増大しているのも事実である。真の意味での快適かつ健康的な生活環境・習慣は、人間の環境適応能を保持・向上しうるものであると考えられる。生きていくうえで必要最低限のエネルギー消費量である基礎代謝量は、冬季に比較的暖かい気温で生活する人で低くなり、このような人が寒い環境に曝されると体温保持のためにより多くの熱産生を要する。これは人工環境が生理機能である基礎代謝に影響し、その結果として寒冷適応能に変化が生じた例である。また、寒冷に曝露された時に体表面からの熱損失を少なくするための生理反応である皮膚血管収縮反応は、日ごろから運動し有酸素運動能力が高い人で強く生じる。これは運動という習慣によって寒冷適応能が修飾された交叉適応の例である。これらの研究例は、程よい生理的負担をもたらす生活環境や生活習慣は、環境適応能の劣化を防ぐことにもつながり、より健康的に生活できる事につながるこ

を示唆している。本講演では、現代人の温熱環境適応能とその個人差に関する研究例を紹介し、より適応的な生活習慣や生活習慣について解説する。

経歴

前田 享史（まえだ たかふみ）**九州大学大学院芸術工学研究院 教授／日本生理人類学会**
九州芸術工科大学芸術工学部卒業。同大学院芸術工学研究科博士後期課程修了。博士（芸術工学）、博士（医学）。福島県立医科大学助手・講師、北海道大学大学院工学研究院助教授、准教授を経て2015年4月より現職。車や家具のデザイナーを志し九州芸術工科大学に入学するも、『デザインは人間のためのものであり、デザイナーは人間をよく知る必要がある』との教授の言葉に惹かれ人間工学を専攻。人間を対象に研究していくうちに人間探求の奥深さ・面白さにはまり生理人類学に没頭する。長年、ヒトの体温調節機能が生活習慣や生活環境から受ける影響について研究。

著書

『健康と環境の工学』（分担執筆、2008年、技報堂出版）
『カラダの百科事典』（分担執筆、2009年、丸善出版）
『体温Ⅱ－体温調節システムとその適応』（分担執筆、2010年、ナッパ）
『人間科学の百科事典』（分担執筆、2015年、丸善出版）
『生理人類学－一人の理解と日常の課題発見のために－』（分担執筆、2021年、理工図書）
『新編　生理人類学入門』（分担執筆、2022年、国際文献印刷社）

など

移動するヒト

	
海部 陽介	
 （東京大・博物館）	
Traveling humans	
Yousuke KAIFU	

ヒトは極めて活発に移動する生き物で、現在、その範囲は地球全体（あるいはそれ以上）に及んでいる。皮肉な話だが、新型コロナウイルスが中国での発生後わずか3か月でアマゾンの奥地を含む全世界へ広がったのは、災難であると同時に、ヒトの際立った移動能力の証ともなった。そうしたヒトの移動には、自力に頼らず乗り物を駆使すること、目的地を自由意志で選択したり変えたりすること、移動そのものを楽しむことといった、他の動物にはみられない特質がいくつもある。しかし霊長類から進化した人類が、最初からそのようなことができたわけではない。700万年におよぶ人類史の中で、我々は独自の移動能力をどのように発展させてきたのだろうか？　またそのことは、ヒトの社会と自然環境にどのような影響を与えてきたのだろうか？　そもそも人類はなぜ、アフリカから世界中へ広がったのだろうか？　ここでは人類進化のタイムラインに沿って、移動という観点から人間について考える。

経歴

海部 陽介（かいふ ようすけ）**東京大学総合研究博物館 教授／日本人類学会**
人類進化学者。理学博士。1969年生まれ。東京大学理学部卒業。1995年より国立科学博物館人類研究部にて研究活動を行い、2020年より現職。アジアに最初の人類（原人）が現れてから現在にいたる約200万年の歴史を解明するため、人類化石の発掘調査や形態分析などを行っている。小学生時から歴史、生物進化、人類などに興味があり、悩んだ末に大学で生物人類学の研究者を志すことに。『できることは何でもする』がモットーで、クラウドファンディングを成功させ、最初の日本列島人の大航海を再現する『3万年前の航海 徹底再現プロジェクト』（国立科学博物館：2016－2019）を実行。2019年に、丸木舟で台湾から与那国島へ渡る実験航海を成功させた。日本学術振興会賞（2012）、海洋立国推進功労者表彰（2021）などを受賞。

著書

『人類がたどってきた道』（2005年、日本放送協会）
『日本人はどこから来たのか？』（2016年、文藝春秋）
『サビエンス日本上陸　3万年前の大航海』（2020年、講談社）
『人間らしさとは何か　生きる意味をさぐる人類学講義』（2022年、河出書房新社）